

## 日露戦争と日土関係 - 20世紀における日露戦争の記憶 -

サルジク・エセンベル

日本が1904年の日露戦争に勝利して台頭したことが、「東洋の新星」日本と協力して西洋の帝国に対抗したいムスリム（イスラム教徒）活動家を引き寄せる動きをもたらし、日本とユーラシアおよび北アフリカ各地のイスラム世界とのつながりを促進した。日本とムスリムの接触には時を隔てた2つの相があり、接触のテーマも違うものになった。日本とイスラム世界との関係の第一期は19世紀の終わりから第一次世界大戦終結までの数十年間である。西洋の帝国主義と植民地支配主義に圧迫感を抱いていた多くのイスラム教養層にとって、1868年の明治維新とともに始まった日本の改革はイスラム世界近代化の格好のモデルに映った。現在も多くの人がそう考えているが、当時のイスラムの人民も、日本人が西洋化の改革と日本固有の伝統をうまく結びつけることができたと判断し、日本が西洋のヘゲモニーに屈しない国家政策の実例を示したと考えたのである。イスラムの人民が特に喜んだのは、日本が1904 - 5年の日露戦争でロシアに勝ったことである。それは圧迫された東洋人でも無敵の西洋列強に立ち向かうことができることを証明した「アジアの目覚め」であった。ムスリムの新聞は1905年に日本がロシアに勝利したことを、西洋の帝国のヘゲモニーに対する被圧迫者の勝利と賞賛した。多くの女性と同様に、トルコの国粋主義者で女権拡張論者であるハリデ・エディプは息子に「トーゴ」という名前をつけた。また、エジプト人、トルコ人、イラン人の詩人が日本と天皇に寄せる詩を書いた<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 日本の勝利を喜んだのはムスリムだけではなく、ロシアのロマノフ王朝などさまざまな権威主義的支配からの圧迫を感じていた世界各地が熱狂した。中国の国粋主義者たちと日本については、Marius Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen* (Stanford: Stanford University Press, 1954) を参照。ユダヤ人の協力については、Ben-Ami Shillony, *The Jews and the Japanese: The Successful Outsiders* (Rutland, Vermont: Charles E. Tuttle Company, 1991), pp. 143-150を参照。日本に協力したポーランドの愛国者たちについては、Ewa Palasz Rutkowska, "Major Fukushima and His Influence on the Japanese Perception of Poland at the Turn of the Century" in Bert Erdström, *The Japanese and Europe Images and Perceptions* (Surrey: Japan Library Curzon Press, 2000), pp. 125-134を参照。フィンランドの地下活動については、Olave K. Falt and Antti Kujula, eds., trans. by Inaba Chiharu, *Akashi Motojiro Rakka Ryusui: Colonel Akashi's Report on His Secret Cooperation with the Russian Revolutionary Parties During the Russo-Japanese War* (Helsinki: Studia Historica 31 Societal Historica Finlandiae, 1988), pp. 177-197を参照。イスラムの熱狂については、Renee Worringer, "Comparing Perceptions: Japan as Archetype for Ottoman Modernity, 1876-1918", Ph.D. dissertation, University of Chicago, 2001, p. 31を参照。

<sup>2</sup> 日本の勝利を喜んだのはムスリムだけではなく、ロシアのロマノフ王朝などさまざまな権威主義的支配からの圧迫を感じていた世界各地が熱狂した。中国の国粋主義者たちと日本については、Marius Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen* (Stanford: Stanford University Press, 1954) を参照。ユダヤ人の協力については、Ben-Ami Shillony, *The Jews and the Japanese: The Successful Outsiders* (Rutland, Vermont: Charles E. Tuttle Company, 1991), pp. 143-150を参照。日本に協力したポーランドの愛国者たちについては、Ewa Palasz Rutkowska, "Major Fukushima and His Influence on the Japanese Perception of Poland at the Turn of the

明治時代（1868 - 1912年）には日本の大アジア主義者が中心になって、ロマノフ王朝、イギリス、オランダを共通の敵およびライバルとして日本と協力することを望んだムスリムの活動家とつながりを持った。日本とイスラムとの関係の第二期は、第一次世界大戦と1917年10月のロシア革命後に帝国日本がアジア帝国として世界により強くアピールする政策・戦略を持って、世界の強国として行動し始めたときに顕著になった。日本の当局はムスリムとの以前からのつながりをより計画的に利用して、一般に「回教政策」（イスラム圏工作）と呼ばれた政策を実行した。回教政策は多数の目的を持つ非公式の対外政策・戦略になったのである。イスラムは、ときにはロシア共産党勢力の脅威に対する砦にもなった。また、中国で抗日的国粹主義に対抗する親日的「利敵活動」の基盤になることもあれば、アジアの西洋帝国に抗するアジア多国籍同盟の分子になることもあった。回教政策の第二期には日本の当局が、大アジア主義者が発するアジア友愛宣言を利用して、明治期の縁故により活動家を募った。彼らは離散して北アジアに住むムスリムから新規の協力者を得て、ロシア、中国、東南アジア、さらには中東においても、日本の政治的・軍事的目的のために無数の地下活動を行った。日露戦争の結果、両者間に生まれた明治の遺産から派生した、この初期の日本とイスラムとの関係においては、ロシア出身のチュルク語族とオスマン帝国出身のトルコ人が特に重要であった。日露戦争中に存在した明治の日本とムスリムとのつながりの記憶が、明治時代に遡る日本とイスラム教徒との親交の歴史を「再構築」した新しいアジア主義者の活動の基盤となり、昭和時代にアジア主義者として世界を見る日本の新しい回教政策を正当化したのである<sup>3</sup>。

日本とイスラム、そしてトルコ人との話は、明治から昭和へのもう1つの近代日本史のようである。明治時代にイスラム教徒とトルコ人を発見したのは日本政府のエリー

---

Century” in Bert Erdström, *The Japanese and Europe Images and Perceptions* (Surrey: Japan Library Curzon Press, 2000), pp. 125-134を参照。フィンランドの地下活動については、Olave K. Falt and Antti Kujula, eds., trans. by Inaba Chiharu, *Akashi Motojiro Rakka Ryusui: Colonel Akashi's Report on His Secret Cooperation with the Russian Revolutionary Parties During the Russo-Japanese War* (Helsinki: Studia Historica 31 Societal Historica Finlandiae, 1988), pp. 177-197を参照。イスラムの熱狂については、Renee Worringer, “Comparing Perceptions: Japan as Archetype for Ottoman Modernity, 1876-1918”, Ph.D. dissertation, University of Chicago, 2001, p. 31を参照。

<sup>3</sup> Kaoru Sugihara and J. A. Allan, *Japan in the Contemporary Middle East* (London: Routledge, 1993), pp. 27-54; Hiroshi Shimizu article on pre-war Japanese relations with the Middle East; 杉田英明『日本人の中東発見 - 逆遠近法のなかの比較文化史 -』（東京大学出版会、1995年）。一般向けの解説として、田澤拓也『ムスリム・ニッポン』（小学館、1998年）がある。Hiroshi Shimizu, “The Japanese Trade Contact with the Middle East: Lessons from the Pre-oil Period” in Kaoru Sugihara and J. A. Allan, eds., *Japan in the Contemporary Middle East* (London: Routledge, 1993), pp. 27-54; Nakamura Kojiro, “Early Japanese Pilgrims to Mecca” *Orient*, Volume XXII (1986), pp. 47-57; Selçuk Esenbel, “Japanese Interest in the Ottoman Empire” in Bert Erdström, *The Japanese and Europe Images and Perceptions* (Surrey: Japan Library Curzon Press Ltd., 2000), pp. 95-124; Hee-Soo Lee, *İslam ve Türk Kültürünün Uzak Doğu'ya Yayılması* (イスラムおよびトルコ文化の極東への伝播) (Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı yayınları, 1988)を参照。注目すべき研究は、前掲の Worringer, “Comparing Perceptions”である。

トではなく、明治維新に起源をもち明治政府のエリートに対抗する一派である大アジア主義の日本人であった<sup>4</sup>。明治期の日本帝国の運命については一般的意見に同意しつつも、日本のアジア主義者は明治維新を、退行する政治体制と植民地政策に抗する偉大なアジアの目覚めと見ていた。彼らは、西洋を文明開化としてあこがれる明治初期のエリートの西洋崇拜的見方には賛成しなかった。初めてムスリムとのつながりを持った日本の大アジア主義者には黒龍会（黒龍江に因む。海外ではブラック・ドラゴンと呼ばれた）や玄洋社などの右翼組織出身者が多かった。彼らは明治の日本におけるアジア主義の前衛で、アジアにおける日本の権利を闘争的に唱導するグループであった。日本とイスラム世界との協調のために重要な施設としてもう1つ、近衛篤磨が創設した東亞同文会があった。これは中国と日本との文化的理解と友好関係を促進するために新設された学校で、ロシアに対する日本の情報員を養成する機関としても機能した<sup>5</sup>。

また、国際場裏の新参者だった日本がイスラム諸国と外交関係を築くことができたのは、ずっと後になってのことで、それらの国が独立してからだった<sup>6</sup>。それまでは西洋の植民地政庁を通じてムスリムと接触を持つが、オスマン帝国やアフガニスタンおよびイランといった君主国などの弱いイスラム国家に不平等条約を要求するしかなかった。後者の国々はいずれも、欧州列強との国際関係を決定づけた不平等条約に署名していた。こうした困難があったにもかかわらず、明治時代にオスマン帝国との継続的接触や親善使節派遣という形で日土関係が始まった。オスマン帝国は弱いながらも、バルカン諸国と中東を領地とするイスラム世界の大国として、まだ生き長らえていた。保守的モダニズムと汎イスラム主義的外交政策で知られたスルタン、アブデュルハミト2世（在位

<sup>4</sup> 19世紀の日本人とトルコ人との関係をまとめたものに、Selçuk Esenbel, "Japanese Interest in the Ottoman Empire" in Bert Edström, *The Japanese and Europe Images and Perceptions* (Surrey: Japan Library Curzon Press, 2000), pp. 96-101がある。政府のエリートは、イスラム文化を現代性に反するものとして否定的に考える傾向があり、ときにはヨーロッパ人の否定的な布教観を受け入れた。イスラム世界を、乾燥した不毛な砂漠に陰気な人々が住み、政府は腐敗して日本の門出にはそぐわない異質の地として描いたのは、1880年から81年までの間に日本外務省の吉田正春がイランとオスマン・トルコについて書いた論文など。

<sup>5</sup> 黒龍会は1901年に内田良平が設立したもので、玄洋社とも関係があった。頭山満が精神的リーダーであった。黒龍会は東西調和、武勇の精神の復活、教育改革、海外展開などの考えに与っていた。そのメンバーは軍や文民実業家などとなつてつながりがあり、情報員や通訳として軍と密接な関係のある仕事をしてきた。また、中国の国民革命にも関与していた。一部のメンバーは日本の対中国政策にかなりの影響を与えた。第一次世界大戦後、黒龍会は労働運動や社会主義運動の弾圧に携わるようになった。1946年、軍国主義とファシズムのかどでアメリカ率いる占領軍によるバーンを受けた。黒龍会と玄洋社に関する重要な文献は、E. H. Norman, "The Genyosha: A Study in the Origins of Japanese Imperialism" *Pacific Affairs* (17 September 1944), pp. 261-284; Marius B. Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen* (Stanford: Stanford University Press, 1954)である。

<sup>6</sup> Shimizu, "The Japanese Trade Contact with the Middle East", pp. 32-33. 日本とトルコとの外交関係は1924年に始まった。両大戦間を通じて中東における唯一の日本大使館があった。アフガニスタン、イラン、エジプトとの外交が始まったのは1930年代半ばになってからで、エジプト、レバノンなど西洋の委任統治領においては、日本の公使館員は統治機関内で仕事をしなければならなかった。日本とパキスタンおよびインドネシア系イスラムとの関係はさらに遅れ、第二次世界大戦後、イギリスとオランダの植民地支配が終了してからのことになった。

1876 - 1908年)は特に、「東洋の新星」日本をロシアとイギリスの帝國的利権に対抗するパートナーとして、密接な関係を築くことに関心を持った。日本の高官や軍人が立て続けに非公式訪問をしたあとの1889年、スルタンは帝国のフリゲート艦「エルトゥールル」を明治天皇への親善使節として日本に派遣した。1890年、帰路についた同艦は不幸にも9月16日に和歌山県の串本大島沖で台風に遭って沈み、士官と水兵のほとんどを失った。日本の戦艦「金剛」と「比叡」が生幸存者69人をイスタンブールに送り届けると、海軍士官と水兵はスルタンとイスタンブール市民の深甚な感謝で迎えられた。さらに、この悲劇の結果として旧沼田藩(群馬県)の若者、山田寅次郎(1866 - 1957年)がトルコに赴き、日土関係史の重要なパイオニアになった。彼はトルコの首都に20年近くとどまって日本と中東との貿易に従事し、オスマン帝国政府と明治政府との間を取り持つ、一種の「名誉領事」として働いたのである。だが、トルコの人民が真摯に日本との友好を望み、アブデュルハミト2世が日本との協調に格別の関心を持っていたにもかかわらず、日本とオスマン帝国との政治的関係は簡単には進まなかった。山田寅次郎とイスタンブールでの彼のビジネス・パートナーで陰の人物に徹した中村健次郎が日露戦争中の黒海におけるロシア艦隊の情報を定期的に伝えていたとき、オスマン帝国政府は見て見ぬふりをしていた。だが他方では、ロシアと敵対しないように、その海域における情報活動を制限したのである。実際、欧州列強に圧迫されていたオスマン帝国政府は日本に対して、日本の力に憧れる人民の熱意にある意味で逆行する、一種の「たそがれ外交」を行った。日本が1905年に日露戦争で勝ったあと、オスマン・トルコの人民が東洋の新星に共感していたにもかかわらず、スルタン、アブデュルハミト2世とオスマン・トルコの閣僚は、その間にイスタンブールを訪れた日本人を「アジアの連帯」の名のもとに暖かく迎える一方で、不平等特権条約に調印するようにとの明治政府の度重なる要請は固辞して、この列強ゲームの新人に西洋列強と同じ特権を与えることを避けたのである<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> オスマン帝国政府は、日本の外交交渉に丁寧に対応し、明治の貴族階級の人々を、惜しめないアジア結束の言辞とふんだんな勲章で迎えた。19世紀末のスルタン、アブデュルハミト2世は皇帝のフリゲート艦まで派遣して明治天皇と友好の文書を交換した。多くの勲章、贈り物、丁寧な言行が駆使されたオスマン帝国と日本との関係については、Worringer, "Comparing Perceptions", pp. 47-114を参照。山田の経歴と日土関係については、Selçuk Esenbel, "A Fin de Siecle Japanese Romantic in Istanbul: The Life of Yamada Torajiro and His Toruko Gakan", *Bulletin of SOAS*, 59/2 (1996), pp. 237-52; Selçuk Esenbel, "Japanese Perspectives of the Ottoman World", in Selçuk Esenbel and Inaba Chiharu, eds., *The Rising Sun and the Turkish Crescent: New Perspectives on the History of Japanese Turkish Relations* (hereafter, *The Rising Sun*) (Istanbul: Bogazici University Press, 2003), pp. 7-41; Inaba Chiharu, "The Question of the Bosphorus and Dardanelles during the Russo-Japanese War" in *The Rising Sun*, pp. 122-144; セルチュク・エセンベル「世紀末イスタンブールの日本人 - 山田寅次郎の生涯と『土耳其画観』 -」(池井優編『近代日本とトルコ世界』[勁草書房、1999年] ) 71-100頁、池井優「日露戦争とトルコ」(『法学論争』第66号〔2004年3月〕) 1-17頁を参照。

日本の大アジア主義者、ロマノフ王朝のトルコ語圏のイスラム世界、それにオスマン・トルコとの相互関係は、そうした知識人社会からの「誘い」（政府からの誘いではない）に対して1904年の日露戦争中に日本人が「応答」したものと解釈できる。それを日本帝国の利益のために利用できると日本の当局が考えた。ロシアのムスリムのうちチュルク語族は日本の自信満々のアジア主義的メッセージを、西洋的近代性と帝国ロシア特有のスラブ民族の熱狂的愛国主義からの解放を説く上で説得力があると考えた。汎イスラム主義者のムハメッド・アキフ、青年トルコ党のアブドラ・ジェブデトなど、オスマン・トルコ世界のトルコ人知識人たちが、日本をイスラム世界の近代化、民族意識、改革主義のモデルとするこの議論に参入した<sup>8</sup>。西洋のための近代化を模倣するのではなく、近代的なものと共存できる改革されたイスラムを思い描く汎イスラム主義を唱道する者もいれば、全チュルク語民族を合体し、ロシアの支配からの独立を鼓舞する非宗教的な汎トルコ主義を提唱する者もいた。汎イスラム主義者も汎トルコ主義者も、日本を近代化の見事な実例とみなしていた。近代化の中にも固有の文化的要素を保持していたからである。熱心な人々は日本人を改宗させてイスラム世界を強化することさえ望んだ<sup>9</sup>。アラブ世界にも、こうした汎イスラム主義者の日本への共感があった。ムスタファ・カミル、アハマド・ファジルほか多数の、エジプトの汎イスラム主義者の知識人たちが「東洋の新星」日本に関する大衆向けの本を発行し、それが彼らの反英民族主義的論説と一体化した。

日本の軍部は日露戦争後、日本がロシアに勝ったことに対するイスラム世界の熱狂を、日本の利権のために好都合だと考えた。戦後まもなく、日本の軍人がトルコの領地を訪れて、中東のトルコ語社会およびアラビア語社会における民衆の親日観を調査したとオスマン・トルコの文書が伝えている。当の日本人たちも、東洋の日出ずる国、新星のイメージがイスラム世界の出版物で宣伝されるように働きかけ、日本の天皇がイスラム教に改宗するかもしれないという、当時流布していた噂まで広めた可能性もある<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 中央アジアにおける汎イスラム主義的理想としてのイスラム・日本の改革論議については、Hélène Carrère d'Encausse, *Islam and the Russian Empire: Reform and Revolution in Central Asia* (London: I. B. Tauris and Co. Ltd, 1988), pp. 54-79, 58-68を参照。オスマン帝国の外交政策、青年トルコ党戦略、ロシアおよびソ連政府との闘争、インドの汎イスラム主義に関する重要な汎イスラム主義的考察については、Jacob M. Landau, *The Politics of Pan-Islam Ideology and Organization* (Oxford: Oxford University Press, 1990)を参照。アラブおよびトルコのムスリムの西洋モダニズムに対する理想的現代化としての日本観の詳細な研究に、Worringer, "Comparing Perceptions"がある。

<sup>9</sup> Worringer, "Comparing Perceptions", pp. 203-217.

<sup>10</sup> Selim Deringil, "Ottoman Japanese Relations in the Late Nineteenth Century" in Esenbel and Inaba, eds., *The Rising Sun*, pp. 42-48を参照。改宗のプロバガンダについては、Worringer, "Comparing Perceptions", p. 99を、青年トルコ党員アブドラ・ジェブデト、アハメド・リザと日本については、Worringer, "Comparing Perceptions", p. 203-217、杉田『日本人の中東発見』220-224頁を、アラブの知識人については、Worringer, "Comparing Perceptions"を参照。

イスタンブールの青年トルコ党員アブドラ・ジェブデト、アハメド・リザやエジプトの国粋主義者を含む多くのイスラム系知識人たちにとって、日本がロシアに勝ったのは「立憲主義が帝政の独裁政治に勝利した」ことであり、日本が西洋の帝国主義に抗して速やかに発展できたのは1889年の明治憲法のためであった<sup>11</sup>。熱狂的なエジプト国粋主義者であり汎イスラム主義者、また、明治憲法の崇拜者でもあったムスタファ・カミルは、「我々が日本に感嘆するのは、日本が東洋の政府で初めて、西洋文明を利用してアジアにおける欧州帝国主義の盾に抵抗したからだ」と賞賛した<sup>12</sup>。

このように、大アジア主義を媒介とした日本とイスラム世界との協調関係は、単に政治的利便性で始まったのではなく、近代性に関する知的な議論、さらには憲法観までも共有したのである。エジプト人のムスタファ・カミルやオスマン・トルコの知識人で憲法主義の唱道者であったアブドラ・ジェブデトと同様に、同時代の人物でアジア主義的考えを持つ明治時代の代表的自由主義者であり、日本を訪れたイスラムの活動家の世話をすることになった徳富蘇峰は、その精神史の中で、この時点では古い保守的伝統を拒絶し、西洋式の議会政治を支持していた。ただし後には、第二次世界大戦を遂行する軍部に協力する好戦的国粋主義者になった<sup>13</sup>。

ロシアのタタール族ジャーナリストで反体制活動家であり、尊敬される著名なオスマン・トルコの汎イスラム主義知識人となったアブデュルレシト・イブラヒム（1853 - 1944年）の生涯が、このイスラムと日本との知的友好史における国境を越えた活動を体現している<sup>14</sup>。日本の大アジア主義者たちと終生協力関係を続けたイブラヒムの活動には、ムスリムの世界的な政治課題を設定し、日本と連携して西洋のヘゲモニーに対抗するよう日本人を促す意図があった。

導師（イマーム）であり裁判官（カーディ）でもあったアブデュルレシト・イブラヒムは、後期ロマノフ王朝のチュルク民族ムスリムにおける国粋主義および改革主義の潮

<sup>11</sup> 憲法については、Worringer, “Comparing Perceptions”, pp. 36-37を参照。

<sup>12</sup> 西洋帝国主義への対抗策としての西洋文明については、ibid., p. 34を参照。

<sup>13</sup> John D. Pierson, *Tokutomi Soho, 1863-1957: A Journalist for Modern Japan* (Princeton: Princeton University Press, 1980), pp. 11, 76, 106-114.

<sup>14</sup> イブラヒムの生涯は、この世代の「革命的世界放浪者」を代表するもので、協力とネットワーク作りを求めて世界中の都市から都市へ歩きまわった。著作はほとんどがオスマン・トルコ語、アラビア語、またはタタール語とロシア語で出版されたため、世界中の大勢の人が彼の考えを読むことができた。伝記に、Mahmud Tahir, “Abdurrasid Ibrahim 1857-1944,” *Central Asian Survey* 7, no. 14 (1988), pp. 135-140がある。イブラヒムに関する最近の画期的研究成果は、Selçuk Esenbel, Nadir Özbek, İsmail Türkoğlu, Hayrettin Kaya, Ahmet Uçar, Francois Georgeon, (special file) Özel Dosya Abdürresid Ibrahim (1) *Toplumsal Tarih* 4: 19 (July 1995), pp. 6-29; (2) *Toplumsal Tarih* 5:20 (August 1995), pp. 6-23; Nadir Özbek, “Abdurrasid Ibrahim (1857-1944) The Life and Thought of a Muslim Activist,” M. A. thesis, Bogazici University, 1994に記されている。イスラム式政治変換方式による変換におけるボルガタタール人イブラヒムと汎トルコ主義者トガンについては、Şerif Mardin “An Islamic Political Formula in Transformation: Islam, Identity, and Nationalism in the History of the Volga Tatars,” in Charles E. Butterworth, I. William Zartman, eds., *Between the State and Islam* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), pp. 59-8; OSS, R&A, no. 890.2, pp. 15-16, 25-26, appendix pp. 63, 80を参照。

流の中枢であったカザン地域で、政治と言論の中心人物になった。イブラヒムは国内では国粋主義的目標を追求し、外国では汎イスラム主義、すなわちイスラム教徒が西洋の帝国の重圧に対抗する世界的ネットワークの構築を唱道した。後に第二次世界大戦中のOSS（アメリカ戦略事務局）報告書で「炎の伝道者」と称されたイブラヒムは、日本軍の武官で日露戦争中は在ヨーロッパ情報員の指導者であった明石元二郎大佐と親しい友人になった。イブラヒムの日本との「運命的な結婚」は、彼が1908年末に東京を訪れ、約5ヵ月間滞在したときに始まった。その間に彼は、すでに孫文の革命などのアジア民族主義運動に関わっていた黒龍会の日本人アジア主義者と密接な連帯を築いた<sup>15</sup>。

イブラヒムの出版物によって、世紀の変わり目の東京が、多くの反植民地主義者・国粋主義者と同様に日本と協力して西洋の帝国主義諸国に対抗することを望んでいたムスリムの活動家にとっての避難所だったことがわかる。イブラヒムのほかに、抗英活動のためにエジプトを追放されて東京で暮らしていたエジプト人国粋主義者の陸軍将校アフマド・ファドリー・ベイ（1874年生まれ。おそらく20世紀初めに夭折。年月日不明）がいた。インドからの亡命者の1人、モウプリ・バラカートゥラー（1856 - 1927年）は有名な汎イスラム主義・反帝国主義者で、インドから追放されて東京大学でウルドゥ語を教えていた。この3人が協力して、汎イスラム主義とアジア主義の考えを支持した英語の論文“Islamic Fraternity”（イスラム同胞愛）を発行したが、後にイギリスの圧力を受けた日本の当局に差し止められた。イブラヒムとバラカートゥラーの活動から、日本のメッセージをイスラム系アジアで広めることに関心を持っていた日本人アジア主義者がすでにいたことがわかる。イブラヒムはイスラム名を取り入れた東京の先駆的日本人アジア主義者の1人、ハサン波多野烏峰（1882 - 1936年）のパンフレットを翻訳した。“Asia in Danger”（危機に瀕するアジア）と題するこのパンフレットには、アジアで西洋帝国主義国の軍隊が行った斬首、拷問、大虐殺の痛ましいほどに生々しい写真が載っており、イスラム世界で大々的に配布された。東亜同文会の卒業生である波多野は、アジア大陸の二大番人である日本とトルコ人とでアジアにおける欧州帝国主義者の活動を妨げることができると論じた。アハメド・アリガ・バニヤロ（1868 - 1946年）は純粋な神道とイスラム教の興味深い統合を行った。神道の開祖である神への信仰とイスラム教のアラー神思想に類似性を見たのである<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> イブラヒムと息子のマニールについては、黒龍会『黒龍会三十年事歴』（黒龍会、1930年）17、21頁を参照。孫文と黒龍会の親交については、Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*を参照。

<sup>16</sup> 波多野と有賀については、El Mostafa Rezrazi, “Dai Ajiashugi to nihon isuramukyo: Hatano Uho no choho kara isuramu e no tabi”（大アジア主義と日本のイスラム教 - 波多野烏峰の諜報からイスラムへの旅 - ）AJMES, No. 12（March 1997）, pp. 89-112、Worringer, “Comparative Perceptions”, pp. 144-145を参照。*Asia in Danger*のオスマン・トルコ語訳*Asya Tehlikedel*は、ボアジチ大学図書館、前Robert College collectionが所蔵。東亜同文会の詳細については、Peter Duus, Ramon H. Myers, and Mark R. Peattie, *The Japanese Informal Empire in China, 1895-1937*（Princeton: Princeton University Press, 1989）, pp. 210-271を参照。1905-7年にウルムチ（テ

1909年、イブラヒムは黒龍会の協力でイスタンブールに戻り、中国とイギリスやオランダの植民地のムスリム居住区を訪れて、日本が将来イスラムの救済者になるというメッセージを伝えた。イスタンブールで発行した*Java Letters*と題する論説集で、イブラヒムはインドネシア人ムスリムの友人に、10年後に日本がイスラム教徒をオランダの首かせから解放しに来ると断言している。ボルネオ島の有名なウラマー（宗教学者）は、イブラヒムの日本人の友人がオランダ統治地域の土地26,000ヘクタールを買うのに協力したと答えた<sup>17</sup>。

1909年にイスタンブールに戻る途中でイブラヒムは、立ち寄ったボンベイで黒龍会のメンバーである山岡光太郎（1880 - 1959年）に会った。2人はまず、メッカとメディナを訪れ、「オマール」山岡は聖地を訪れて大日本帝国を代表してアラブの指導者たちと交流した最初の日本人巡礼者となった。オマールはイブラヒムの協力を得て、イスタンブールの汎イスラム主義者の諸団体に向けて日本の親イスラム的メッセージと日本の親イスラム組織である亜細亜義会（アジアを覚醒させる会）について語る会議を開いた。山岡は中国人ムスリムの間で日本のためのネットワーク作りをし、中国イスラムの専門家であり大川周明の友人であった30代のハジ・ヌール田中逸平など未来の日本人ムスリム布教者を養成する仕事を続けることになった<sup>18</sup>。

日本とロシアのイスラム世界との連携を勧めるイブラヒムの初期の主張は、このアジア主義のテーマをムスリムの近代化モデルの観点で考えたものである。1909年3月21日に日本外務省の外交問題論説委員会に答えたインタビューで、イブラヒムは「タタール人」をロシアから解放する必要性を論じた。また、日本は学ぶべき近代化のモデルであると言った。ロシア、中国、インド、トルコに住む1億人近いムスリムが日本の強力な社会基盤になると強調し、将来それを日本の大アジア主義者が回教政策に利用できるという人口論を展開した。ただし彼は日本のモデルを評して和魂洋才（日本の精神と西洋の技術）という言葉を使った。ムスタファ・カミルと同様にイブラヒムもまた、日本の憲法と、ロシアの独裁支配とは異なる日本の自由で進歩的な近代化から、日本を賞賛したのである<sup>19</sup>。

イブラヒムが日本から帰国した後にイスタンブールで出版したものの中で、1910年と翌年の*Alem ı Islam ve Japonya'da İntisari İslamiyet*（イスラム世界と日本におけるイスラム教の布教）には汎イスラム主義の大アジア主義への接近を支持するムスリムの論

---

イーホア）にいた波多野養作にも言及している。

<sup>17</sup> Ahmet Ucar, on Ibrahim and Java letters in Esenbel, Özbek, et. al, special file on Abdurresid Ibrahim *Toplumsal Tarih* 20 (August 1995), pp. 15-17.

<sup>18</sup> 山岡光太郎については、Nakamura, "Early Japanese Pilgrims to Mecca", pp. 47-57; Sakatomo Tsutomu, "The First Japanese Hadji Yamaoka Kotaro and Abdurresid Ibrahim" in Esenbel and Inaba, eds., *The Rising Sun*, pp. 105-121を参照。

<sup>19</sup> インタビューについては、「タタール人独立の希望」（『外交時報』第137号〔1909年〕26-33頁）を参照。



理が詳細に書かれている<sup>20</sup>。この本で日本のイメージは、オスマン帝国とロマノフ王朝のトルコ語族に向けて、帝国主義的西洋に対抗する「東洋の新星」として描かれている。イブラヒムは、協力して日本人をイスラム教に改宗させれば、日本が必ずイスラムの救済者としての新しい役割を果たしてくれるだろうと提唱した。山岡が改宗を日本のために正当化したのに対して、日本人を改宗させたいというイブラヒムの願いは神学的でイスラム教、特にスンニ派の伝承に沿ったもので、イスラム世界のリーダーは「争いの地」すなわち異教徒クリスチャンの国々から日本を守るという主張であった。当時の一部のムスリムと同様に彼の論理も、日本人の十分な人数がイスラム教に改宗すれば、ムスリムを西洋の圧迫から解放してくれるだろうというものだった。だが日本と中国人ムスリムが手を結んだら日本が中国市場に進出することができ、確実に経済的利益を得ることができるだろうという彼の実利的論理もまた、同じように目を引くものであった。イブラヒムはこう書いている。

中国が日本の市場になるのは自然なことだが、中国人と日本人の間に強い憎しみがあるのは否定できない。日本が中国の市場にうまく進出するには、中国人ムスリムと近い関係を築くしかない。彼らの経済的制約が日本人をイスラムに引き寄せせらるう。日本人がイスラム教に改宗すれば〔とイブラヒムは主張する〕、アジアの3分の1を征服することになるだろう。イスラム教のウラマーがそのように日本人を導くことができれば、彼らの中にイスラム教を受け入れられる偉大な才能があるのは間違いない。だが我々が単純に救済を求めた場合は、おそらく誰も説得できないだろう<sup>21</sup>。

汎イスラム主義者であるイブラヒムは当時のイスラム文化を、イスラム教の価値観と共存できる現代性において理想的なイスラム教を取り戻す方向で改革したいと考えていた。この点においてイブラヒムは日本の理想的イメージを、ロマノフ王朝の西洋的体制はもちろんイスラム教徒であるオスマン・トルコの東洋的体制よりも「近代的な」イスラム改革のモデルとして描いている。並々ならぬ熱意で、彼は日本の近代的な事物を読者に紹介している。それらは東京大学の歴史協会（科学史を研究していた）、女学校（家族と国に献身する近代的な妻を養成する）、日本式郵政事業（ロシアのものよりはるかに良い）、歌舞伎（国民的伝統演劇の典型）などであり、仁丹（消化に最高）まで

<sup>20</sup> Abdurresid Ibrahim, *Alem-i Islam ve Japonya'da Intisar-ı İslamiyet* (イスラム世界と日本におけるイスラム教の布教) 2 vols. ( vol. 1, Istanbul: Ahmet Saki Bey Matbaası, 1910; vol. 2, Istanbul: Kader Matbaası, 1911 ) (邦訳 小松香織、小松久男『ジャポonya』【第三書館、1991年】); Modern Turkish version, Mehmet Paksu, ed., *Yirminci Asrın Başlarında İslam Dünyası ve Japonya'da İslamiyet* (20世紀の変わり目におけるイスラム世界と日本におけるイスラム教) (Istanbul: Yeni Asya Yayınları, 1987) . Hereafter, *Alem*

<sup>21</sup> *Alem*, pp. 319-321.

含まれていた。イブラヒムは日本人を典型的な異教者とは見ず、文中で日本人の男女は清廉で勤勉、道徳的で高潔な、イスラム教に改宗しさえすれば完璧なムスリムになれる人々として描いている。強調されているのは古いものを保持することではなく、慣習を刷新して国を創ることである<sup>22</sup>。

だが、近代化、日本、イスラム教に関するイブラヒムの文は、20世紀にしばしば見られた、思想領域と軍の情報機関との間の見過ごされたつながりも示している。1909年のある夜にロシア語が堪能な日本軍の将校たちと行った、東洋統一の展望に関する7時間の話し合いで、イブラヒムはイスラム教を利用して中国、ジャワ、インドのムスリムたちの協力を得ることを中心とする、41項目からなる世界中のムスリムの連携計画を提案したという<sup>23</sup>。

将来に向けて重要だったのは、イブラヒムと日本人アジア主義者が意見交換した結果、山岡が著書ですでに述べていた回教政策の青写真ができたといブラヒムが主張している点である。イブラヒムの本には、ある女学校で撮られた写真がある。そこでは回教政策のポスターがすでに、イブラヒムが立つ演壇の後ろに掲げられている。イブラヒムの文にしても山岡の本にしても、この時点では回教政策は日本の外務省の正式な対外政策を指すものではなく、将来そうなるであろうという願望として描かれている。この言葉が使われているのは、西洋の帝国主義と植民地主義に苦しんでいるムスリムの窮状に日本人が同情してほしいということと、日本がそうした意図をもってムスリムと接触する必要があるということを訴えるためであった<sup>24</sup>。

イブラヒムの本に登場する、1909年に彼の周辺にいた日本人たちも重要である。というのは、彼らが1930年代にかけて、日本人とムスリムとの親交を推進するための団体、「回教会」を結成するからである。この団体には大アジア主義の知識人で、イブラヒムの日本における後援者であった国粹主義組織、黒龍会を創設した徳富蘇峰（1863 - 1957年）、内田良平（1874 - 1937年）、頭山満（1855 - 1944年）のほか、東亜同文会に関係した軍および情報機関の人物たちがいた。意外にも、明治の少数独裁政治家に激しく敵対した自由主義派の国会議員、大隈重信（1838 - 1922年）と犬養毅（1855 - 1932年）の2人もこの団体のメンバーであった。2人は議会制民主主義の提唱者として、よりよく知られているが、ともに対外関係ではアジア主義を支持し、イブラヒムの回想録に見られるように、日本の政界・軍部のエリートにおける黒龍会ネットワークの

<sup>22</sup> 日本人を日本式近代化（和魂洋才、すなわち日本人の精神と西洋の技術）への転換と適合の理想的な国民とするイブラヒムの心酔、女性の教育、電気、郵便業務、歴史協会、医学などにおける日本式近代化のイスラム世界への適用については、*Alem*, pp. 248, 358, 370を参照。

<sup>23</sup> 会談については、*Alem*, pp. 354-364, 359, 366-367, 392-394, 401, 413, 427を参照。

<sup>24</sup> 回教政策のスローガンを背景とする写真は、*Alem*を参照。

メンバーだったのである。2人とも生涯、国外移住したムスリムの信条を支持し、イブラヒムほかの政治活動家を援助し続けた<sup>25</sup>。

イブラヒムの回想録のクライマックスは、1909年の亜細亜義会（アジアを覚醒させる会）の設立式典に関する記述である。この会はイスラム世界における日本の宣伝部門となるべく作られた。この会は、東京にモスクを作る計画を受け入れ、東亜同文会の事務所で日本人とムスリムの友人たちが大アジア主義的イスラム運動への参加を誓う巻物に署名した<sup>26</sup>。

第二次世界大戦中にOSSが「ムスリムの誓い」と名づけたこの1909年の誓約は、世界中のムスリムに潜入して西洋に反抗させようとする日本の長期的陰謀となった。うがった見方をすれば、この誓いが日本の「陰謀」を体現していたという主張はOSSの戦時心理を反映しているが、この誓いによって我々は、明治時代後期のアジア主義の台頭と、その後、1930年代末期にアジア主義が当時の軍国主義的潮流の現れとともにこのイデオロギー的文書が復活したこととの関連を辿ることができるのである。アジアのムスリムとの日本人の協調は、少なくともこの人気のある本を読むことができたオスマン帝国とロマノフ王朝の20世紀初頭の教養人にとっては、「秘密の陰謀」ではなかった。

イブラヒムの本によれば、1909年の巻物に署名した人々は黒龍会、回教会の会員か会友で、日本の国粹主義および帝国主義の政治・軍隊史に関わった人々であった。大原武慶（1865 - 1933年）は1895年の日清戦争から1911年の辛亥革命、さらに満州で活動した陸軍中佐であった。彼は1933年、中国の反乱を組織して死亡した。黒龍会の精神的支柱であった頭山滿は日本の国粹主義運動の中心人物で、常に戦前の日本の国粹主義・軍国主義政治の隠れた主導者であった。中野常太郎と中山逸三は黒龍会の活動家であった。この宣誓書に署名した3人の中国人ムスリムのうち、王公然は1912年に中国回教徒相互進歩協会（Chinese Muslim Mutual Progress Association）を設立したことで知られ、その後も日本人の関係者に協力した。

明治時代に日露戦争とともに始まった日本人と、イブラヒムなどロマノフ王朝およびオスマン帝国のトルコ人世界出身のムスリムとの知的・政治的相互関係が、特に昭和初期の1930年代に再び表面化した。それは日本政府の諸機関が軍事戦略の一環として、さまざまな宣伝・情報活動において回教政策を実施し始めたことによる。その活動の中で、ロシアや中国に抗して北アジアにおける日本の利権を拡大したい日本人アジア主義者や軍の集団が、日露戦争での日本の勝利を賛嘆したムスリムの記憶を利用し始めた。イブラヒムが1908年から1909年にかけて日本で過ごした体験と上記の宣誓書について書いた文書は、1911年にすでにトルコ語で出版され、イスラム世界では多くの人に読

<sup>25</sup> 大隈と犬養については、*Alem*, pp. 201-204, 265, 327を参照。

<sup>26</sup> 宣誓書と署名者については、*Alem*, p. 200を参照。インドのムスリムも同席したが署名しなかった。

まれていたが、日本語で出版されたのはずっと後になってからだった。皮肉なことに、1930年代末に軍事政策の仕事をしていたイスラム専門家、若林半が著書『回教世界と日本』の中で1909年の宣誓書を復活させたのが1938年のことであった。若林の本は明治末期の日露戦争の遺産を、アジアの人々、この場合は西洋帝国主義の圧迫下にあるムスリムへの自由と解放のメッセージとして簡明に甦らせている。明治末期に黒龍会が行ったアジア人解放およびムスリムとの交友活動が、日本とイスラム系の人々との新しい、そして、おそらくより軍事的な連携を提唱するための歴史的背景として利用されたのである。若林はこの本で、宣誓書の話をも日本とイスラムとの関係の根が明治期に遡ることを大帝国結成の文脈で語るプロパガンダの一部として紹介した。この本に掲載された1909年の宣誓書の写真は1911年のイブラヒムの本のものと同様で、やはり黒龍会の自由主義政治家犬養毅、青柳勝敏陸軍大尉、山田喜之助、河野広中の署名もあった<sup>27</sup>。

日露戦争時からの日本とムスリムとの関わりが昭和になって「再発見」されたもう一つの例は、黒龍会が1936年に出版した『東亜先覚志士記伝』である。これは明治維新以来、大日本帝国のアジア主義のために働いた大勢の黒龍会の「愛国者」たちを記録したものである。同書で1909年の誓いの話を辿ってみると、イブラヒムの友人である中野常太郎の伝記の中にドラマがいくつか付け加えられている。同書によれば、『東京朝日新聞』の記事が、黒龍会の会員たちが協力して満州安東省の清真山に寺院を建立し、そこにイブラヒムが描いたアラビア語と日本語の1909年のムスリムの誓いが納められたと報じたという。その版はイブラヒムの手によるコーランの言葉、「おお人類よ結合せよ」で始まっている。中野常太郎はこう書いた。「我々の心の中に少しでも背信があれば、あらゆる天地の神よ、神聖なる怒りをもって罰し給え。」イブラヒムはコーランから別の言葉を加えた。「約束をたがえないことを神の御前で誓う。」この文書はアラビア語と日本語で書かれた、イスラムと日本の美しくも完璧な組み合わせである<sup>28</sup>。

おそらくイブラヒムが日本にいた1909年に署名されたと思われる別の版の宣誓書には、イスラム世界ではすでに浸透していた1909年のイスラム行動主義を通じて日本がアジアに対して包括的に主張する大アジア主義観が表されている。後の解釈によって、個々の行為者および思想と1930年代の日本のアジア主義世界とのつながりを辿ることができる。イブラヒムの日本訪問の叙述に始まり、黒龍会の設立者や明治時代の他のアジア主義者のエリートたちとの関係を描いたこれらの出版物によって、明治時代の日露戦争とムスリム世界の記憶を「再現」することで、日本とムスリムの結束を利用して新

<sup>27</sup> イブラヒムの *Alem* と、その後の若林と『東亜先覚志士記伝』による日本語版に掲載された1909年の宣誓書の氏名は OSS, R & A, no. 890.2, appendix の伝記で確認した。

<sup>28</sup> 『東亜先覚志士記伝』351-352頁。

しいアジア主義者が、日本の国際関係の方向に歴史的真實性を付加しようとしたことがわかる。

日本が1930年代に回教政策を実施したのもまた、明治時代にムスリムの信条を経験したこと、特にロシアのチュルク語族やオスマン帝国のトルコ人と接触したことに基づいている。まず満州に下心がある日本政府が、イスラムをソビエト連邦の共産主義に対する中央および北東アジアの「砦」と考え始めた。後の冷戦期にイスラムを共産主義に対する「緑地帯」にしたCIAの戦略の、戦前の日本版である。この「砦政策」は、第二次世界大戦で日独伊三国同盟を結んだ外相松岡洋右（1880 - 1946年）が考え出したとされている。当時、彼はロシアおよびアジア研究の主な研究機関にもなっていた満鉄（南満州鉄道）の総裁であった。松岡は以前に、1917年10月の革命から逃れて1920年代に満州に落ち着いたロシア系タタール人のムスリムと交流したことによってこの政策を考えついたとされている<sup>29</sup>。

この「砦」思想を構成している1つの理論は、日本人と北アジアのアルタイ語族との間に特別な歴史的関係を認める「我らがアルタイの兄弟」論である。この理論が「旭日旗とトルコの新月旗」を将来のパートナーとして、日本の軍部とムスリムの協力者を結びつけたイデオロギーの枠組みを作った。外務省の中央アジア・イスラムの専門家、今岡十一郎の報告書は、1937年に外務省で行われたこの戦略に関する議論について述べ、ソ連に対する主要な地政学的戦略の1つになったこの議論を逐一掲載している。今岡は中央アジアの人々の歴史と文化を説明した上で、日本は北アジアの日本人の始祖とも関わりがある中央アジアのアルタイ語族と連携する必要があると説いた。また、ソ連はカザフ、ウズベク、トルクメニ、ウイグルのチュルク語族の国籍問題に直面するであろうと論じた。これらの人々は、共産主義者の脅威に抵抗するために、満州が中国北西部、内陸アジアを経て中央アジアの奥地に及ぶ地域で、アルタイ語族ムスリムのイスラム教集団を形成していた<sup>30</sup>。

この見識の精神的ルーツはまたしても、イブラヒムが日本を訪問した当時の明治時代末期における白鳥庫吉のアジア主義的・歴史記述的論説に遡る。歴史学者の白鳥は、日本人と北アジアの遊牧民のアルタイ語文化との間には歴史的つながりがあると論じていた<sup>31</sup>。アルタイ論が表面化したのは、イブラヒムの訪日中に自由主義的アジア主義のジ

<sup>29</sup> 満鉄会・嶋野三郎伝記刊行会『嶋野三郎 - 満鉄のソ連情報活動家の生涯 -』（原書房、1984年）463-464頁。松岡の回教政策とタタール人移民、特にクルバン・アリとその家族については、松岡洋右伝記刊行会編『松岡洋右 - その人と生涯 -』（講談社、1974年）719-720頁を参照。

<sup>30</sup> Honna（1937年12月6日・13日）回教研究会、今岡十一郎、472-499頁、親日派としてのソ連および中国新疆のムスリムに関する報告。

<sup>31</sup> 白鳥庫吉の考えについては、ステファン・タナカの研究 *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*（Berkeley: University of California Press, 1993）, p. 88から引用した。タナカが示したところによれば、20世紀への変わり目の日本の歴史文献で、日本人とアルタイ語族の人々との間の特殊な歴史的つながりが論じられて

ジャーナリストで『国民新聞』の主筆であった徳富蘇峰がアブデュルレヒト・イブラヒムを日本の読者に「ロシアから来たタタールの兄」と紹介し、モンゴルから帰国したばかりの政治家林田が国会で「ジンギス・カンの後裔であるタタールの兄弟」と紹介したときだった<sup>32</sup>。

満州に日本の帝国を建国しようとする組織は第一次世界大戦の結果倒れたロマノフ王朝とオスマン帝国からの多数の移民の避難所になった。彼らはソ連とトルコ共和国に排斥されていた。ムスタファ・ケマル・アタチュルクのトルコが無宗教の革命派でありながら、基本的には共産主義を拒絶した国民主義の革命政権であったにもかかわらず、これらの新しい革命体制はこの時期、協力してイギリスに対抗し、強い友好関係を築いていた。ロシアから来たタタール人ムスリム、青年トルコ党の元将校および情報部員、さらにはトルコから来たオスマン帝国の忠臣すらもが自国ではもはや歓迎されず、日本の庇護のもとに移住者集団を形成した。それは、戦争中は最後まで自らの任務を全うした汎イスラム主義者や汎トルコ主義者、さらには左翼の革命的イスラム主義者まで含む多様な人々であった。国外追放された青年トルコ党のリーダー、エンヴェル・パシャの主導で1922年に中央アジアでチュルク語族が起こしたバスマチの反乱の参加者もいた。そのほとんどが、イブラヒムなどのタタール人が住んでいたボルガ川沿いのカザンおよびバシキール地域の出身であった。10万人の白系ロシアの亡命者とともに約1万人のタタール語族が極東に定住した。1920年代と30年代に約1,000人が日本に移住し、イギリス領インドやオランダ領インド諸国から来たムスリムとともに大きなイスラム社会を作った<sup>33</sup>。

1930年代、松岡と同様に満州の日本軍にとっても、この移民集団は中国北西部と内陸アジアで回教政策を実施して、かつてイブラヒムの滞在中に話し合われたことの一部を実現する戦略の「肥沃な土地」になっていく。1930年代の関東軍情報部長西原征夫がこの件に関する軍の考えについて、ハルビンでの情報活動について書いた1980年に文書で説明している。それによると、「1931年以後、軍はイスラム問題に深い関心を持ち、これらの人々の宗教的共同社会の結末に乗ることができれば、きわめて有効な運

---

いる。東洋史という学問分野の創始者である白鳥は、日本の歴史は西洋史とも東洋史とも違うもので、独自の中国中心の世界を内包しているという考えを主張した。また、日本の歴史のルーツは北アジアにあるため、中国南部の文化圏とは違うとも述べた。日本は内陸アジアと中央アジアのアルタイ語族遊牧民族の文化と特別なつながりがあった。

<sup>32</sup> *Alem*, pp. 216, 317. イブラヒムの1911年の回想録そのものが、トルコ語圏の読者にアルタイ起源説を提示している。床に直に座って囲炉裏を囲んで食事をし、中央アジアの伝統的春祭りサバントイに似た祭りをすることなど、タタール族と日本人の類似点について説明している。

<sup>33</sup> 鴨沢巖「在日タタール人について」(『法政大学文学部紀要』第28号〔1982年〕)27-56頁、鴨沢巖「在日タタール人について」(『法政大学文学部紀要』第29号〔1986年〕)223-302、228-229頁。

動となって威力を発揮すると考えた。この考えでいくと、満州にはロシアからのムスリム移民が大勢いたから、彼らを対ソ連の情報員として使えるはずであった<sup>34</sup>。」

チュルク語族バシキール民兵のリーダーで満州のタタール人移民のイマーム、M・G・クルバン・ガリエフ トルコ語でムハンマド・アブダライ・クルバン・アリ

(1892 - 1972年)の生涯は、北アジアでのソ連と中国に対する日本の軍事・情報戦略の実行におけるムスリム移民の役割を簡潔に示している。小村の記述によれば、クルバンはきわめて巧みに、この「我らがアルタイの兄弟たち」論を使って日本人北アジア起源論を組み立てた。それによって、ロシアを日本の主な敵国とみなした荒木貞夫と真崎甚三郎の両将官の周辺に集まった皇道派の青年将校たちによる中央アジアでの日本の戦略目的が正当化されたのである<sup>35</sup>。

ロシア専門家で満鉄職員である嶋野三郎が、クルバン・アリが皇道派の急進的国民主義革命観の中心人物であった日本の知識人、北一輝に紹介されたくだりについて書いている。嶋野によれば、北は北アジアに独立国家を作ってソ連のムスリムを解放する構想に熱中し、クルバンにその指揮をとるように勧めたという。クルバンはこの陸軍の一派の支援を得て、日本での活動を続けた。その一派は1935年のクーデター未遂事件と1936年の二、二六事件を首謀することになった。黒龍会は再度タタールのムスリム移民を「懐に入った窮鳥」として保護した<sup>36</sup>。

<sup>34</sup> 西原征夫『全記録ハルビン特務機関 - 関東軍情報部の軌跡 - 』（毎日新聞社、1980年）23頁。

<sup>35</sup> 1930年代の日本における松岡とタタール人およびイスラム教徒との関係の詳細については、Selcuk Esenbel, “Japan and Islam Policy During the 1930s” in Bert Edstrom, *Turning Points in Japanese History* (Surrey: Japan Library Routledge Curzon, 2002), pp. 180-214を参照。クルバン・アリは、十月革命後の内戦でロマノフ王族が殺されたエカチェリンブルグ付近で戦ったバシキール市民軍の指揮官であった。彼は同郷人たちを率いてシベリア横断鉄道で中央アジアの高地を越えたあと、極東で短期間、白系ロシア軍と行動をともにした。日本と中央アジアのトルコ人との間の協力関係を正当とする「アルタイの兄弟たち」論を支持する根拠として、彼は互換性があると同時に相補的でもあるバシキール族、ムスリム、トルクメン人、トルコ人の混合を挙げた。嶋野は、彼が殺害の詳細を松岡に報告したと記している。

クルバン・アリが1922年9月に奉天から日本当局（相手の人物は不明）に送ったロシア語の手紙で「我らがアルタイの兄弟たち」論が大々的に論じられている。Library of Congress, M.T. 1.2.1.1 numbers 03676-03694. September 1922を参照。ベルシャ、中国、アフガニスタン、トルコなどの諸国の対外政策に関する文書はいろいろある。Reel 35. Library of Congress Microfilms on Japanese Government Documents; 小村不二男『日本イスラーム史』（日本イスラーム連盟、1988年）71頁。皇道派の若い将校の結社、桜会を創設して昭和維新を論じ、1930年代にクーデターを企てたことで有名な橋本欣五郎大佐がアンカラで大使館付武官をしていたときに革命軍のリーダー、ケマル・アタチュルクの崇拜者になったことが、この「トルコ人構想」を強化した可能性がある。

<sup>36</sup> クルバン、松岡、皇道派の将校たちについては、『嶋野三郎』439-445、460-67頁を参照。クルバンとハルビン情報部長で親独派だった王天および海軍右派の小笠原長生との親交については、Matsunaga Akira, “Ayaz Ishaki and the Turko-Tatars in the East” in Esenbel and Inaba, eds., *The Rising Sun*, pp. 197-215を参照。両名とも、第二次世界大戦時に重要人物となる。ムスリムと大隈、犬養との関係と「窮鳥懐に入れば」については、小村『日本イスラーム史』59-60頁を参照。日本の軍部内派閥の概要については、Richard Story, *The Double Patriots: A Study of Japanese Nationalism* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1957); George M. Wilson, *Radical Nationalist in Japan Kita Ikki, 1883-1937* (Cambridge: Harvard University Press, 1969); Ben-Ami Shillony, *Revolt in Japan: The Young Officers and the February 26, 1936 Incident* (Princeton: Princeton University Press, 1973) を参照。

クルバン・アリがネットワークを作ったムスリムのマイノリティは、ほとんどが日本人が中国の抗日国民主義に抗する親日派に仕立てようとした満州と中国の中国系ムスリムであった。1931年、満州事変のさなか、アリは嶋野などの日本人情報員とともに満州と中国東北部で活発に中国人ムスリムの支援を働きかけていた。この活動においてクルバンと緊密な共同作業をしたのが、オマール山岡によってイスラムに詳しい情報員に育てられたハジ・ヌール田中逸平（1882 - 1934年）であった。もう1人、満州出身の中国本土のムスリム張徳純も日本人と協力し、日本人の援助で建造された奉天の現代的モスクのイマームになった。クルバン・アリは対ソ連情報活動においても、主にプロパガンダとロシア語およびトルコ語を担当して日本当局のために働いた。彼は1927年に東京回教印刷所を設立し、東京モスク計画を立ち上げた。モスクは1938年に日本人の協力で竣工した<sup>37</sup>。

このアルタイ語族・チュルク語族を視野に入れた日本のムスリム戦略への関心が増すにつれて、1930年代初めの日本の回教政策は、特に内陸アジアのウイグル族ムスリムの民族主義者によるソ連および中国からのトルキスタン独立のための動乱を標的とする北アジアにおける地政学的戦略として表面化した。1933年までに「軍部」の一部が回教政策を実行したものである。政府文官の同意なく、または文官が完全に把握していない状態で関東軍、すなわち石原莞爾、板垣征四郎、土肥原賢二らが1931年に満州事変を起したあと、1933年に世界各地からムスリムが日本に押し寄せた。アブデュルレシト・イブラヒムも、日本人の友人に招かれたとして、ついにトルコから日本に戻った。また、有名な汎トルコ主義者の知識人で無宗教の国粋主義者である政治活動家アヤズ・イシャキも1933年に訪日した。彼はすぐに新しいタタール族移民組織、日本イディル・ウラル協会（*Idil Ural Society*）を作り、これはクルバン・アリの汎イスラム主義系統のライバルになった。オスマン帝国の忠臣および汎トルコ主義者となつながら持つトルキスタンの代表的な人物で、クルバン・アリの友人でもあるトルコ共和国建国後のトルコ人移民の1人が、パリから来た反ケマル系のムーシン・カパノグルであった。彼

<sup>37</sup> アジア主義の政治家と軍部支援者の後援を得て、クルバン・アリは1927年に代々木上原の東京モスクの隣接地に東京回教学校を設立し、タタール系移民の子供たちを教育した。1928年には日本における公式なムスリム連盟、日本族連盟の長となった。また、1929年には東京回教印刷所を設立した。この印刷所は第二次世界大戦終了時まで、イスラム教に関する日本人向けの出版物を発行し続けた。トルコ語の出版物で最も興味深いのは雑誌 *Yani Yapon Mubhiri*（新日本ニュース）である。これは1933年に創刊され、極東のタタール人移民に日本の社会と文化のニュースを提供した。アラビア語で出版されたものもあって、特に印刷と装丁の美しいコーランは日本のイスラム教支援の証として、イスラム世界のアラビア語族に配布された。イブラヒムと同様にクルバン・アリも、古典的アラビア語や中国、東南アジア、中央アジア、中東の宗教教育に使われる文学的言語で出版することによって、これらの地域におけるイスラム教出版物を通じてイスラム教への日本の協力を知らしめる大アジア主義論を広めることができると主張した。

日本におけるクルバン・アリの足跡については、OSS. R.A. no. 890.1, p. 97、小村『日本イスラーム史』78頁、『嶋野三郎』463頁、*Honna*, file, vol. 1. S9210-3 欧米局第一課特外第 6366（1932年12月20日）20頁を参照。



はまず満州で、それから東京の陸軍士官学校でトルコ語を教えた。同じ年、トルコ諜報部のメフメット・ラウフ・キルカナータールも訪日し、東京でアラビア語とトルコ語を教えた。おそらく当代随一のイスラム法学者とされていたカザンのムサ・カルラー・ビギエフが1938年、イブラヒムの招きでついに訪日して日本人の教育に協力し、中国と東南アジアで日本のための宣伝活動に携わった<sup>38</sup>。

1933年、日本人アジア主義者とイスラム世界のチュルク語族分子との協力関係によって、北アジアで「共産主義に対する盾」戦略が具体的に実施され、満州と中国の間に楔を打ち込む試みとして初めて表面化した。これは日本の軍部の一部がおそらく関東軍と結託して書いた筋書きで、亡命したオスマン帝国の王子アブドル・ケリム・エフェンディ（1904 - 35年）を内陸アジアのどこかでムスリム独立国家の長に即位させ、ソ連と中国に対する緩衝地帯にしようとするものであった。アジア主義者および国粋主義者として有名で、関東軍ともつながりがあった貴族院議員、菊地武夫中将と一条宮の招きで同王子がシンガポールから来日したと、1933年5月20日に日本の新聞が報じている<sup>39</sup>。

日本軍のアジア主義者の諸派や北一輝などの知識人が、トルコ人やムスリムが明治以降、日本に対して抱いていた関心を、ロシアや他の西洋列強に抗する協調の世界的基盤に利用しうるものと見ていたのは明らかである。しかし1933年のオスマン帝国王子の件に関して言えば、日本とトルコの政府間にはこの時点できわめて劇的に表面化した政策上の利害関係があった。トルコとソ連の大使館は直ちに、アブドル・ケリムの東京入りは「ムスリム満州国」すなわち日本の傀儡政権を内陸アジアにも作る策略だと抗議した<sup>40</sup>。

1934年に日本外務省が記したこの件に関する報告には、亡命したオスマン・トルコの王子がトルコ大使館と事を起こしたとある。この報告書で外務省は他人事のように軍

<sup>38</sup> イブラヒムは第一次世界大戦中に青年トルコ党特務機関（*Teskilat-ı Mahsusa*）の一員になった。彼は大アジア主義思想のもとに、ロマノフ王朝軍のタタール系元捕虜で *Asya Taburu*（アジア大隊）を組織した。彼らはイラクのクテルアマラの戦いでオスマン軍兵としてタウンゼント將軍率いるイギリス軍と戦い、降伏させた。その戦争中、イブラヒムとバラカチュラは、アフガニスタンのイギリスに対して反乱を起こそうとした。また、イブラヒムはボルシェビキ革命の余波で赤軍と白軍の板ばさみになったタタールの民間人を助けてトルコに移住させた。その後のイブラヒムについては、special file, Abdurresid Ibrahim (1), *Toplumsal Tarih* 4: 19 (July 1995), pp. 6-29; 同 (2) *Toplumsal Tarih* 5:20 (August 1995), pp. 6-23を参照。Ayaz Ishakiについては、小村『日本イスラーム史』96頁、*Honna*、フランス紙 *Tribune Libre* の記事 Çapanoğlu (Çobanoğluは誤植)、17 April 1935, p. 284、小村『日本イスラーム史』90頁を参照。経歴は、Mehmet Görmez, *Musa Carullah Bigiyef* (Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1994), p. 47を参照。

<sup>39</sup> 『東京日日新聞』英語版 (May 21, 1933)、『東京日日新聞』英語版 (May 22, 1933)。

<sup>40</sup> OSS, R & A. no. 890.1, 15 May 1944, pp. 114-119. この国際印刷物は、内陸アジアでのムスリムの反乱が実を結んだ場合に、トルコ王子を王位につかせる計画が成功する見込みについて書いている。ソ連の新聞 *Pravda* と *Izvestia* は内陸アジアに第二の「ムスリム系」満州国を作ろうとしている日本の陰謀を攻撃したが、英領パレスチナの民族主義新聞 *Filastin* は、この出来事には大きな利益があると主張した。イタリアの雑誌 *Oriente Moderno*、東京の *Trans Pacific*、カイロの *al-Mokattam* は王子が新疆のスルタンになる可能性を肯定したり否定したり、さまざまであった。

部とクルバン・アリの支援者である黒龍会および参謀本部を非難することで、同省が王子の招待と無関係であることを示す一方、広田弘毅外相がトルコ大使館に杞憂であると説明した。アンカラの外務省の記録にあるトルコ側の報告が興味深い。王子訪日直後の1933年9月18日に東京で行われた広田弘毅外相とトルコの代理大使との会談について記したもので、外相の保証を外交用語で表現している。トルコの在東京代理大使によれば、広田弘毅はトルコ側に日本、トルコ、ロシアの友好関係を次のような美辞麗句で保証したという。「世界を照らしているものが2つあります。1つは月です。もう1つは太陽です。一方はトルコを、もう一方は日本を象徴しています。この2つは必ず将来の政界を照らします。私はトルコ政府と強い友好関係を築くべく、最大限の努力をします。直接的にはもちろん、間接的にもこの関係を害する可能性のあるものは、何によらず排除します。貴国と同様、我が方もロシアに対して友好政策をとっています。その点でも我ら両国は一体であります<sup>41</sup>。」

満州事変を起こした軍部は中国のムスリム居住地域に関して、独自の「外交政策」を追求していた。問題の計画の立案者たちは、東トルキスタンすなわち中国新疆省のチュルク語族居住地域と北西部の甘肅省および寧陝県の中国人ムスリム居住地域を親日体制に取り込みたいと考えていた。1931年の満州事変後、日本は1933年に国際連盟を決然と脱退し、関東軍は満州周辺に対ソ連および対中国緩衝地帯を建設すべく熱河省などの中国東北部に侵攻した<sup>42</sup>。一方、新疆のチュルク語系ウイグル族の反乱が1931年に始まり、それが1933年の東トルキスタン・イスラム共和国宣言 (*Sarki Türk Islam Cumhuriyeti*) として結実した。このトルキスタンの反乱は簡潔に言えば、かつての青年トルコ党员である多くの国の汎イスラム主義者がアフガニスタンから新疆に結集して参戦したものであった<sup>43</sup>。

<sup>41</sup> *Honna*, file on the Prince (1934) 調査、在 *honna* 回教徒トルコ=タタール人紛争問題(クルバン・アリおよびAyaz Ishakiの戦いとアブドル・ケリム王子来日問題に関する調査) pp. 59-67; T. C. Basbakanlik Cumhuriyet Arsivi (The Archive of the Republic, The Office of the Prime Minister), Hariciye Vekaleti (The Republic of Turkey Ministry of Foreign Affairs), 30 October 1933, File 434B24, Place number: 257.729.23, *Japon Hariciye Nazirinin beyanati hakkında* (日本の外相の声明について), copy of the Tokyo charge d'affair's report, September 19, 1933, Tokyo.

<sup>42</sup> James William Morley, *Japan's Road to the Pacific War*; Selected translations of *Taiheiyō senso e no michi: kaisen gaiko shi*, vol. 2: *The China Quagmire: Japan's Expansion on the Asian Continent, 1933-41* (New York: Columbia University Press, 1983), pp. 3-202. 熱河省侵攻調査および華北に関する計画。

<sup>43</sup> 1931 - 33年と1936年の東トルキスタンの反乱について、Owen Lattimore, *Pivot of Asia* (New York: AMS Press, 1975) は、背後に日本の強い陰謀があると見ている。Lars-Erik Nyman, *Great Britain and Chinese, Russian and Japanese Interests in Sinkiang* (Malmö: Esselte Studium, 1977) は、日本の役割についてはどっちつかずだが、日本の資料は一切使っていない。Allen S. Whiting and General Sheng Shin-ts'ai, *Sinkiang: Pawn or Pivot?* (East Lansing, Michigan State University Press, 1958); Andrew D. W. Forbes *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: Political History of Republican Sinkiang, 1911-1949* (Cambridge and New York: Cambridge University Press), pp. 300は日本の「傀儡君主」としての、またソ連の強い抗議を誘発するための存在であったオスマン帝国王子について詳述している。小村『日本イスラーム史』80頁は、この件を日本の真のイスラーム教支援として肯定的に扱っている。

この計画は結局、日本当局内に意見の相違があって内陸アジアへの直接侵攻を断念したことで消滅した。外務省もその作戦が実行不可能と判断したのかもしれない。1934年の夏、ムスリムの反乱はソ連の介入によって鎮圧された。9月にはアブドル・ケリム王子が密かにニューヨーク入りし、1年後に自殺したと見られるが真相は不明である<sup>44</sup>。

すなわち、日土関係の歴史は近代化、国家の再生、19世紀の西洋帝国主義または覇権主義に対する批判などについての共通の知的関心として始まった。しかしオスマン帝国と明治の日本にとってはロシア 少なくともオスマン帝国にとってはイギリスも

を牽制するという共通の戦略の歴史でもあった。日本が1904 - 5年の日露戦争で勝ったことは、ロシアおよびオスマン帝国のトルコ系民族とムスリム世界に数々の影響を及ぼした。ロシア出身のイブラヒムなど、トルコ語系の知識人が一部の日本当局者と親しい関係を築き、新しい「救済者」または近代化の格好のモデルとしての日本のメッセージを両帝国のムスリム文化人に広めた。明治時代に日本のアジア主義の政治家と知識人たちがこの熱狂を新しい協調関係と戦略の土壌と考えたのは想像に難くない。しかし知識人と政治家の関心が違っていたという複雑な事情が表面化した。特に昭和初期には日本政府、特に軍部とアジア主義観を持つ政治家の一派が北アジアの中国・ロシアとの国境で日本の利権拡大をもくろんだのである。松岡洋右、黒龍会、満州に本拠を置いた関東軍、軍の特務機関、また、東京における彼らの同志である菊地武夫中将と参謀本部が、この明治の遺産、特にムスリムの知識人や民衆の日本への共感を、対ロシア・中国戦略を実行するためのムスリム世界への接触に利用し始めた。若林など、1930年代末の軍の動向に関与した現代イスラムの専門家である日本のアジア主義者らは、明治時代の日本とムスリムのつながりの記憶を、回教政策に歴史的真實性を与えるために頭腦的に利用した。1930年代末には外務省の専門家たちも同じ主張をしている。しかしトルコの民衆の間に日露戦争の記憶に基づく強い親日観が残っており、イブラヒムなど多くのトルコ人との個人的つながりが存続していたとはいえ、日本の回教政策はトルコ共和国とソ連の当時の地政学的利益を脅かすものになっていた。また、オスマン帝国王子の作戦は地政学的な事情により政府間レベルで頓挫した。とはいえ、明治時代からのトルコ系を含むムスリムとの日本人の関係は、歴史論ばかりでなく、より密接に、1930年代の日本軍と文民政府の戦略において新しいアジア主義的イスラム対応の基盤を作った人間的つながりをももたらした。日本の回教政策は第二次世界大戦前夜には、日本政府にとってさらに重要になるのである。

<sup>44</sup> 『嶋野三郎』468頁。New York Times (August 4, 1935), p. 21.